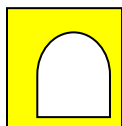


日吉台地下壕保存の会会報



第144号
日吉台地下壕保存の会

報告

第二回ガイド養成講座フィールドワーク

運営委員 小山信雄

今年4月17日、東京、神奈川等首都圏を中心に緊急事態宣言が発令され、さまざまな行動・活動が制限されることとなりました。5月、全国的に宣言は解除となったものの、未だコロナの収束の目途はたっており、コロナに対する警戒は引き続き行われています。私達保存の会の活動も2月の見学会開催以降中止状態が続いており、総会をはじめとするすべての活動は自粛されています。最も重要な活動のひとつであるガイド養成講座は例年、1月から5月にかけて毎月一回行われてきましたが、今回は1月の講座は開催できたものの、以降中断されています。何とか再開の路はないものかと思案を重ねた結果、ようやく、10月3日に第二回目の講座として、フィールドワークを開催することとなりました。地上の戦争遺跡を中心として、更には日吉キャンパス内及び周辺にある古代・中世・近世の遺跡も含めたコースを考え、実践しました。参加者は受講者3名とガイド5名で、約3時間のツアーとなりました。コースの詳細は以下ようになります。

13時：日吉駅集合⇒消防派出所前⇒陸上競技場横⇒チャペル⇒高校グラウンド越しの第一校舎⇒耐弾式堅坑・弥生式堅穴住居跡⇒寄宿舍手前⇒マムシ谷上部・新道路入口⇒稲荷祠・横穴墓⇒新幹線ガード横付近の地下壕出入口(10a)⇒欠山駐車場の段差⇒足立宅前の地下壕出入口(16a)⇒航空本部等地下壕の出入口(7a, 6a)・開発工事現場⇒宮前公会堂のお地蔵さん・庚申塚・観音像・たたり石⇒弓道場脇の峠道・稲荷祠・中田加賀守の石碑(写真)⇒マムシ谷下部・航空本部等地下壕出入口⇒保福寺⇒理工坂・人事局地下壕出入口
⇒**16時**：陸上競技場脇ベンチにて解散

今回のフィールドワークでは日吉キャンパス内外にある戦争遺跡以外のものの見学も行え、新たな見学コースのモデルともなり、とても意義のあるものになったと思います。コロナの一刻も早い収束を期待しつつ、実現可能な形の地下壕見学会の再開をめざし、知恵を出し合いながら検討を進めております。



保福寺にて

【目次】

報告【1p】 第二回ガイド養成講座FW 運営委員 小山信雄

読書と映画【2-4p】 コロナ禍での日常、読書と映画鑑賞

運営委員 岡本雅之

港北今昔こぼれ話【4-6p】

◇愛新覚羅溥儀・浩夫妻と日吉の人々

副会長 亀岡敦子

◇下関の中山神社

運営委員 佐藤宗達

報告【6-7p】 平和のための戦争展inよこはま

実行委員 吉沢てい子

報告【7-8p】 特別企画2「戦争・空襲」に参加して

運営委員 上野美代子

聞取り【8-11p】 ある兵士の軍隊体験記(1)

運営委員 遠藤美幸

連載【12-16p】

☆日吉第一校舎ノート(20)西暦と皇紀(その2)

会長 阿久沢武史

☆地下壕設備アレコレ(29)今も残る白い陶器の低電圧碍子

運営委員 山田譲

☆海外の戦跡めぐり(15)支那事変・南京事件

運営委員 佐藤宗達

新刊本の紹介【17-18p】 戦没学徒 林尹夫日記[完全版]

運営委員 山田譲

秘話【19p】 木造船

運営委員 佐藤宗達

☆みなさんの戦争体験談・資料募集☆

活動の記録(2020年8~11月)

読書と映画

コロナ禍での日常、読書と映画鑑賞

運営委員 岡本雅之

新型コロナウイルスの影響が収束に向かう気配がない。感染第二波が続いており、これから冬に向かったインフルエンザの流行も怖いところである。

日吉台地下壕見学会は3月から中止とし、今年の第14期ガイド養成講座も1月の初回は実施できたものの、それ以後延期となり、ようやく10月3日に第二回目のフィールドワークを再開できた。しかし地下壕は閉鎖的な空間であるので地下壕への立ち入りは当分難しいだろう。見学会については地下壕に入ることはできなくても、地上だけのコースとしてスタートできればと検討を始めている。ガイド学習会も中止が続き、ようやく9月21日に再開することができ、三密に配慮しながら続けていけそうである。

この半年間、月2回他の見学会が中止、学習会等他の集まりもなくなった間、私個人のコロナ禍の生活について少し紹介してみたい。

私は日吉台地下壕については、存在はかなり以前から知ってはいた。2008年の「まむし谷の航空本部地下壕出入口の発見」についても新聞で読んだ記憶がある。2013年3月に42年間のサラリーマン生活を終え、たまたまその年の8月15日に、初めて地下壕見学会に参加した。その時のガイドの方々の様子はよく覚えている。

その後、妻の後押しもあり、2016年（第10期）ガイド養成講座を受け、現在ガイド活動を楽しく続けている。

中学時代、雑誌「丸」の愛読者であった私は近代史、軍事史について興味を持っており、本を読む事は好きだった。また小学生の頃からずっと映画を観るのも大好きだった。

したがってこの半年間、コロナ対策のステイホームによってできた時間は、もっぱら読書と映画鑑賞に費やした。ただ映画館で観ることを前提にしているので、自粛期間中は映画館も閉鎖され、今年はまだ鑑賞本数40本にとどまっている。（毎年、映画館での100本を目標にしている。）あと2ヶ月で60本は到底無理、今年はあと20本がせいぜいであろう。目標未達になるのは止むなしである。

戦争の惨禍を忘れず語り継ぐには、体験者の証言が直接聞けなくなっている現状において、戦争遺跡が重要な役割を持ち、各種史資料による事実の確認（実際、何があったのか）が大事である。その視点から、この期間に読んだ書籍と観た映画の中で印象に残ったものをひとつずつ紹介したい。

まずは書籍。『帝国軍人』—公文書、私文書、オーラルヒストリーからみる— 戸高一成・大木毅著。角川新書2020年7月発行。

共著者のうち、戸高氏については呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）館長、『証言・海軍反省会』等多くの著書によってよく知っていたが、大木氏については2ヶ月前に読んだ『独ソ戦』—絶滅戦争の惨禍—岩波新書、で初めて知った。

この本、二人の対談形式で、戦後、陸海軍の軍人たちの生の声を聞きながら（オーラルヒストリー）、また多くの史資料にあたり、事実を解明しようとしてきた苦労を語っている。残された史資料（一次資料であっても）がすべて事実とはいえないし、軍組織としての文書改ざんもあつた。本人の証言も自分の都合の悪いことは言わない、嘘を言う等、問題は多いとのこと。

その意味ではこれからの歴史研究者はこのような史資料の読み方を勉強する必要があると。吉田裕氏（一橋大学名誉教授、『日本軍兵士』等、著書多数）などが史資料の読み方を若い研究者に教授してもらえると良いとの文言もあった。カルチャーセンターや私塾のような場所で史資料、戦記文献の読み方を若い人に教えることも重要とのこと。史資料や個人の証言本を読むうえでとても参考になるいい書籍であると感じた。この本の中で印象に残ったいくつかを挙げる。

- ・海軍を守るためにつくったこと、あるいは言わないことがある。→ミッドウェイ海戦の運命の五分間、ミッドウェイ海戦では捕虜を茹(ゆ)で殺していた、捕虜に重りをつけて海に投げ込む
- ・戦闘詳報をメイキングする
- ・国体護持とは何か→平泉澄氏に軍令部作戦部長富岡定俊少将が聞いてこいと。三種の神器の継承行為そのものであるとの答え
- ・ミズーリ艦上での降伏文書調印式に富岡定俊少将が参加したわけ
- ・澤地久枝・吉村昭の作家としての執念はすごかった(資料集め等)
- ・松井石根大将の『陣中日記』の改竄(ざん)
- ・確信犯的に史料を紛失した黒島亀人(元連合艦隊首席参謀・軍令部第二部長)
→『戦藻録』(宇垣纏著)の一部を借り出して紛失(実際には焼却した?)
- ・検閲用と本音用の二種類の日記があった
- ・歴史に残るメイキング→ババル島虐殺事件
- ・空気を残せるところがオーラルヒストリーの貴重さ

この本の最後にブックガイドとしてお二人の推薦図書が「基礎文献」・「陸軍」・「海軍」別に掲載されている。私もほんの数冊、既読のものがあつたが、何冊かは新たに購入して読んでいる。また寺田さん所蔵資料の港北図書館へ寄贈した図書の内、たまたま私が引き取った中の一冊、福井静夫『写真日本海軍全艦艇史』が挙げられていた。もちろん『戦史叢書全102巻』も。

次に映画の話である。「ミッドウェイ」、ローランド・エメリッヒ監督(インデペンデント・デイ、ホワイトハウス・ダウン、パトリオット等作品多数)、9月11日公開。私は公開すぐの9月14日に観て、10月4日にも再度観た。もう一度観るつもりである。

ミッドウェイ海戦と真珠湾攻撃を監督らしいスペクタクルで描くが、それだけでなく米軍の情報戦としても興味深い。またそれぞれ日米の登場人物がしっかりと描き分けられている。山本五十六(豊川悦司)、南雲忠一(國村隼)、山口多聞(浅野忠信)、源田実(?)。ニミッツ、キンメル、ハルゼー、スプルーアンスの各米海軍提督たち。それにドラマの主人公である米軍の艦爆パイロットたちと情報部の二人の将校。

映画は、暗号解読して真珠湾攻撃への警鐘を鳴らした情報将校(彼はミッドウェイ作戦でも活躍する)、それに米空母乗組みの爆撃機パイロットが主人公。いくつか印象に残っているシーンを挙げる。

- ・真珠湾が攻撃されているさなかに、情報将校の意見を受入れず奇襲攻撃を受けてしまったキンメル太平洋艦隊司令長官(後、罷免・降格)がその情報将校に「次の司令官にはもっと強く進言しろ」と。
- ・このミッドウェイ海戦2ヶ月前の4月18日、東京初空襲、ドウリットル爆撃隊(16機のB-25)の空母ホーネットからの発艦。空襲時、昭和天皇の防空壕への避難シーンもある。
- ・ミッドウェイ海戦で撃墜された米軍パイロットが日本の駆逐艦に救助され、尋問を受けた後、重りをつけて海に投げ込まれる場面も描かれていた。(さすがに、ボイラーに入れて茹(ゆ)で殺すシーンはなかった。)
- ・真珠湾奇襲の場面もそうだが、海戦での米海軍急降下爆撃の場面は圧巻である。エメリッヒ監督の面目躍如といったところか。
- ・つくられた「運命の5分間」(米空母発見の報を受け、陸上攻撃のための爆弾装備から艦船攻撃のための魚雷装備に取り換える作業があと5分あれば完了、攻撃機が発進できた)については、「発進準備は」と聞く南雲長官に源田実と思しき艦隊参謀が、「あと30分で終わります」と答えていたようだ。
- ・エンドロールの最後に各登場人物(アメリカ側だけだが)のその後について触れていた。この海戦に生き残った軍人たちがその後どう生きたかについてである。

・その中で、詳細は覚えていないが、ドウリットル爆撃隊の生き残りは毎年集まっていた、その最後の一人が2000年代に亡くなったとの表示が印象的だった。

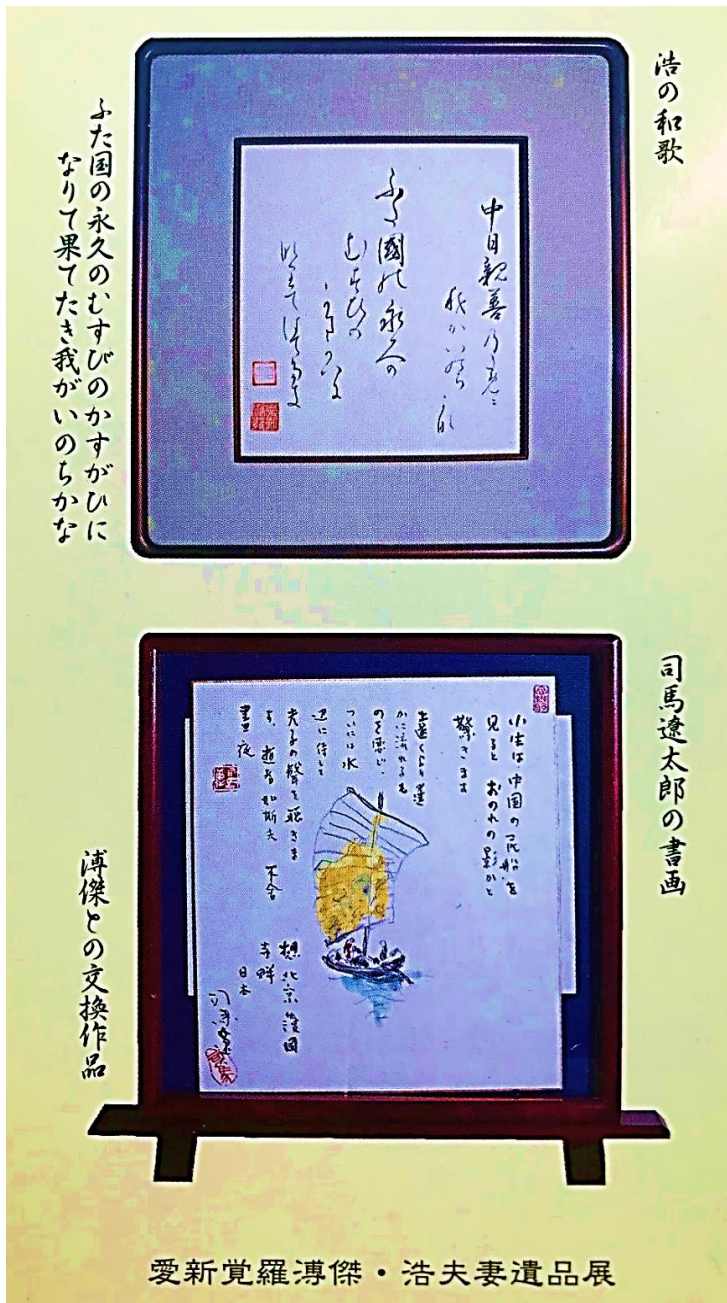
以上、映画の印象記である。できればもう一度観て、書いてきたことを再確認したいと思っている。

日吉台地下壕とは直接関係ない私個人の雑感を色々書いたが、アジア・太平洋戦争の実態をより深く理解する為に種々な史資料を読み込み、また映像等も活用しながら、次の世代に伝えていけるように、これからもガイド活動を頑張りたいと考えている。

港北今昔こぼれ話

◇愛新覚羅溥傑・浩夫妻と日吉の人々 (2)

副会長 亀岡敦子



「千葉市ゆかりの家・いなげ（愛新覚羅溥傑氏仮寓）」作成の絵

1943年秋、溥傑が陸軍大学校に派遣されたため、東京麻布で家族4人の水入らずの生活が始まりました。学習院幼稚園に通うため、一足早く日吉の嵯峨家に戻っていた慧生も合流し、物資は不足がちであったとはいえ、厳しい関東軍の目と、日本人であるという微妙な立場から離れることができ、一家にとって東の間の穏やかな日々であったようです。1945年2月、陸軍大学校を終えた溥傑は、浩とまだ4歳だった婿生とともに新京(長春)に戻り、学習院小学校に通っていた慧生は日吉の嵯峨家に残りました。早朝羽田空港に見送りに行き、笑顔で手を振る慧生の姿が、父の目に映る最後の姿となりました。

敗戦まで慧生には外出時には常に2人の護衛がついており、日吉の子どもたちは「あの子は偉いんだぞ」とささやきあっていたそうです。また、ある女性はこんな思い出話をしてくれました。「雪が降った日に坂道でソリ滑りをしていたら、裏戸から慧生ちゃんが見ていてね、遊びたそうだったけど、とうとう声をかけられなかったの。」子どもたちにも、自分たちとは違う世界の人という認識があったようですし、近所の大人たちは、元気にスキップしている姿や、明るい笑顔をよく覚えていました。

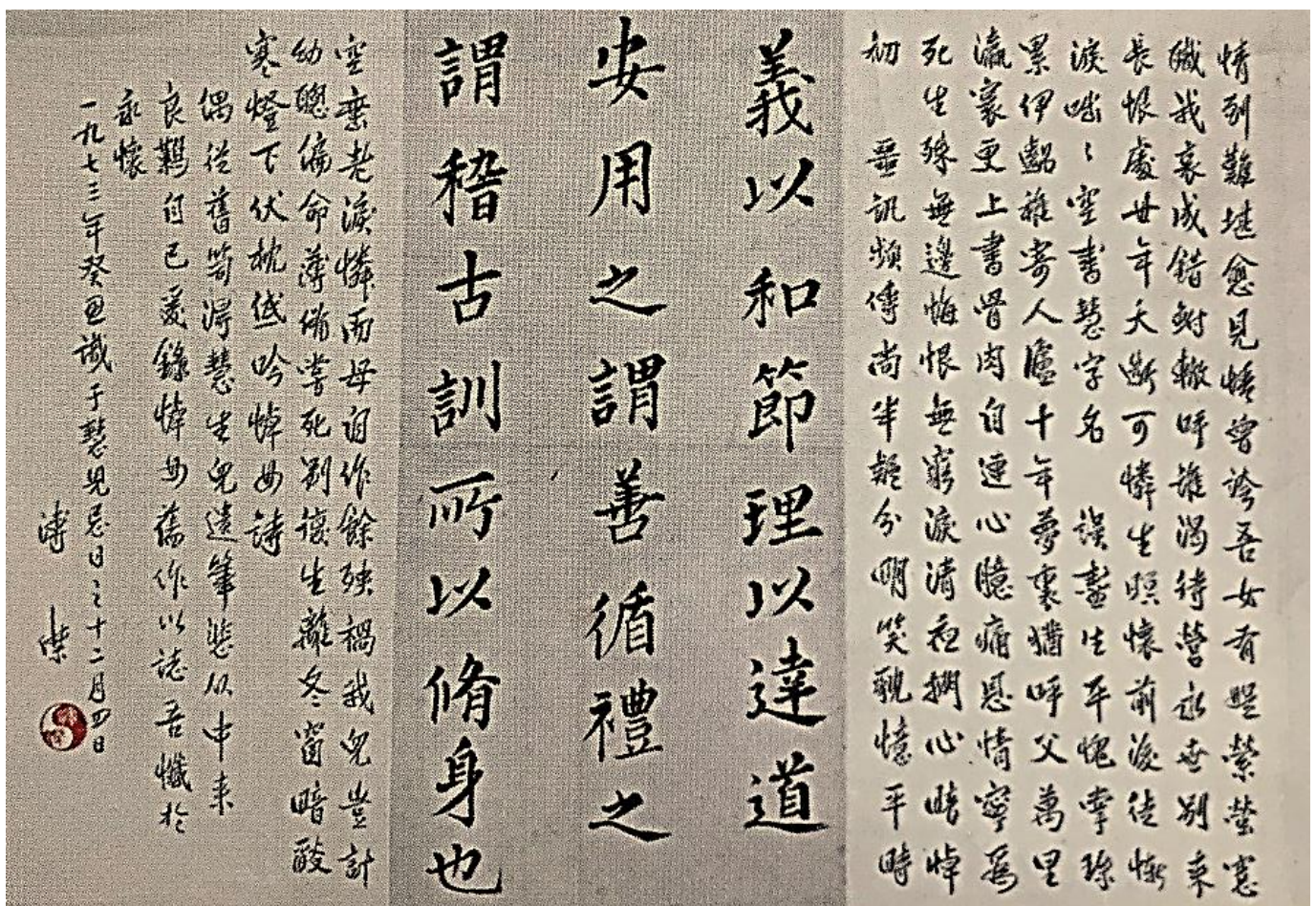
敗戦とともに境遇が一変したのは、新京にいた溥傑一家でした。無理やり建国した満州国は瓦解し、洩る大本営を説き伏せて愛新覚羅一族は日本に亡命する手はずでしたが、平壤経由で日本に飛ぶはずの飛行機は、なぜか奉天に行き皇帝以下溥傑もソ連軍の捕虜となってしまいました。溥儀と溥傑はソ連の収容所で5年間を過ごした後、中国に引き渡され1950年に撫順の「戦犯管理所」に移されました。一方、浩は8月15日「玉音放送」を聞いた後、それまでのうつぶんを晴らすような現地

容所で5年間を過ごした後、中国に引き渡され1950年に撫順の「戦犯管理所」に移されました。一方、浩は8月15日「玉音放送」を聞いた後、それまでのうつぶんを晴らすような現地

の人たちや、侵攻してきたソ連兵から身を隠し、金品を渡して何とかやり過ごしながら、皇后や皇帝の姉妹などとともに、何とか生き延びたのです。八路軍に拘留されていた時でも、6歳の嬌生は所員に可愛がられていました。国民党軍と八路軍の戦闘にも巻き込まれ、刑務所に留置されるという経験もし、やっとの思いで最後の引揚船に乗ることができたのは1947年、溥傑と離れ離れになってから、1年4か月が経っていました。

そして浩の自伝『流転の王妃の昭和史』に書かれているように、「嵯峨の父と、疎開先から戻った母と末の妹と慧生たちは、東横線の日吉に住んでいました。私と嬌生もそこに身を寄せることになり」愛新覺羅家と日吉の人たちとの、心温まる交流が生まれたのです。華族制度もなくなり元侯爵は孫娘のために庭に野菜を植え、鶏を飼っていたようです。また親子3人で摘み草に出かけ、笹舟を流した小川はどこなのか、蝶を追いかけた菜の花畑はどこにあったのか、興味は尽きません。本を読むのが何より好きで、自分の中の中国人に目覚め、長い髪の毛を三つ編みにして東横線で学習院に通っていた慧生は、日本と中国の架け橋になりたいという夢を持っていました。慧生は中学生の時、大胆にも行方の定かでない父のために、当時の周恩来首相に手紙を書きます。それがきっかけで、撫順戦犯管理所に収容されている溥傑は家族との文通が許され、9年間の空白の後、家族の間で頻繁に手紙が交わされました。離れてはいてもどんなにか幸せな親子関係だったか、二人の自伝から読み取ることができます。

そんな折、1957年12月に学習院大学に進学し、学生生活を楽しんでいたはずの19歳の慧生が学友と天城山で心中を遂げたのです。この慧生の死については、心中が定説となっていますが、日吉の住民の中には「心中とは思えない」という話を聞いたことがあります。当時



長女・慧生の書に
痛恨の詩をそえる

父・溥傑

「千葉市ゆかりの家・いなげ
(愛新覺羅溥傑氏仮寓)」作成の絵葉書

日吉の町内会や消防団は捜索に加わり、2人が発見された様子を知る人の感想のようです。幼いころからの明るくて聡明な慧生を知る人たちは、信じられなかったと言います。ただ、そのころを知る古老はほとんど亡くなって、もう話を聞くことができないのが残念です。

60年に溥傑は特赦で北京に帰り、1年後、浩と次女嬌生は慧生の遺骨を抱いて北京に渡りました。その後日本に来た時には、必ず日吉を訪れ、食事を共にして旧交を温めたそうです。書家としても有名だった溥傑の書を所蔵する家や、愛新覚羅家からの手紙や葉書を大切にしている人は少なくありません。次女は日本で幸せな結婚生活を送り、いまなお精力的に両親や姉のため、日中の架け橋となって活躍しています。

嵯峨家がどのような事情で、郊外の田園地帯である日吉に土地を購入し、居を定めたか知る由もありませんが、明るく穏やかなこの地での生活と交流は、愛新覚羅家の人々にとって心休まる得難いものであったのではないのでしょうか。

何不自由なく育った令嬢浩は、1987年に時代に翻弄された波乱万丈の73年間の人生を閉じました。幻の満州国に振り回された溥傑は94年に87歳で最愛の妻のもとに旅立ちました。いま、親子3人は京都の二尊院と下関市の中山神社に祭られています。

参考文献 愛新覚羅溥傑『溥傑自伝』河出書房新社

愛新覚羅 浩『流転の王妃の昭和史』新潮文庫

◇下関の中山神社

運営委員 佐藤宗達

下関の綾羅木本町に中山神社があります。明治天皇の叔父にあたる中山忠光を祭神として1865年(慶應元年)に建てられた中山社に由来します。この境内に愛親覚羅社があります。

中山忠光の曾孫にあたる嵯峨浩さんは昭和12年愛新覚羅溥傑氏と結婚、昭和62年北京にて



て死去され遺骨は昭和63年1月に長女・慧生さんの遺骨と共に納められました。鎮座祭に参列した溥傑氏からは自分の骨もここに納めて欲しいと述べられ、平成6年死去後分骨が納められております。社殿は京都に向かって東向きに建てられますが愛親覚羅社は中国大陸に向かって西向きに建てられております。また境内には宝物殿があり忠光関連の資料に加え溥傑氏・浩さん関係の遺品が展示されています。また社殿わきに白雲木が植えてあります。これは浩さんの結婚に際し貞明皇后より渡された種から育った木です。中山神社へはJRで下関から2駅目の綾羅木駅にて下車。徒歩10分ですがJR電車の本数が少なく、下関駅前からは中山神社行きのバスが出ており本数も多いのでバスが便利です。

報告

「核・宇宙・環境」と「戦争・空襲」をテーマにー 「第25回2020平和のための戦争展 in よこはま」

実行委員 吉沢てい子

5月29日横浜大空襲の日に合わせて毎年開催してきた「平和のための戦争展 in よこはま」は、今年は新型コロナウイルス感染拡大のためやむなくその時期は中止しました。

しかし、今年は戦後75年、横浜大空襲から75年の節目の年。諦めずに横浜市会が非核宣

言した時期（10月2日）に合わせて、10月10日・11日にかながわ県民センター2階ホールで開催しました。

10日は「核・宇宙・環境」をテーマに特別企画。世界各地で紛争や対立、軍事的緊張が続く中で、平和な世界をどう築いたらいいのか、それは「敵対」ではなく「国際協力」を進めていくこと。核兵器廃絶でも、宇宙科学の分野でも、環境の分野でも、国際協力・連携が進み、平和な未来を切り開く力になりつつあります。3つの分野で3人の方に講演していただきました。横浜原爆被災者の会の和田征子さんは「1200万を超える人々からヒバクシャ国際署名に協力していただき、核兵器禁止条約は月内に50か国批准の見通しで年明け発効へとこぎつけた」と講演。中村哲さんと一緒に仕事をされたJICAの国際協力専門員・永田謙二さんは「アフガニスタンで、武力によらず、井戸や用水路を作り、砂漠を肥沃な土地に変え、食糧を生産してきた中村流国際協力が多くの命を救ってきた」。宇宙の分野では、国際宇宙ステーションで米ロが協力して任務を遂行し、世界の望遠鏡と天文学者たちが一つのチームになり、ブラックホールの撮影に成功しています。12月地球帰還の「はやぶさ2」の成果も世界の成果として生かされるのではとJAXA宇宙科学研究所広報担当の大川拓也さんに「宇宙で育む平和な未来」と題して講演していただきました。

命の大切さ、国際協力の必要性、科学技術の在り方、活かし方、どう対処していくかなど現在の新型コロナウイルス問題とも共通するところがあり、いま必要な視点だと思います。11日は「戦争・空襲」をテーマに特別企画。日吉台中学演劇部が空襲跡地をフィールドワークしながら作った台本による「記憶を語り継ぐ」朗読劇を。NGO グローカリーは「東神奈川で空襲体験者がどう逃げ惑ったか」を聞き地図に落とした報告を。最後にアジア・太平洋戦争の戦場と兵士のリアルな実像をまとめ、戦争体験をいかに伝えるかご努力されている東京大空襲・戦災資料センター吉田裕館長の講演が行われました。

今回は講演などの特別企画だけで展示はありませんでしたが、継続し開催することで、悲惨な戦争を忘れず、繰り返さず、平和な未来を築く一助になったのではないのでしょうか。

報告

特別企画2「戦争・空襲」に参加して 運営委員 上野美代子

1945年5月29日、横浜は空襲に見舞われました。毎年、この日に合わせて「平和のための戦争展inよこはま」が開催されていました。今年は新型コロナウイルス感染拡大のため、10月10日・11日に特別企画が行われました。私は2日目の「戦争・空襲」特別企画に参加しました。

中学生による朗読劇。アメリカはなぜ一般人のいる街に爆弾を落とせたのか？それは日本が一億総決戦ということで、老人・女性・子供たちに竹やりを持たせて闘う準備をしていた。だから日本には一般人はいないと考えられていたとのこと。生命を大切にできなくなる戦争とはおそろしいものです。NGOグローカリーによる横浜大空襲の第一弾が着弾した東神奈川で空襲にあわれた4人の方の聞き取りの報告。当時7歳だった方のお話では、戦火の中近くの大人たちに助けられながら逃げまわり親と再会。どんなに心細かったことでしょう。

最後は、アジア・太平洋戦争の戦場と兵士のリアルな実像をまとめ戦争体験を伝えていらっしゃる東京大空襲・戦災資料センターの吉田裕館長の講演でした。アジア・太平洋戦争で



横浜国立日吉台中学校演劇部による朗読劇

特徴的なのは軍人軍属の戦死者の多くが餓死、海没死、特攻死、自殺、処置（動けない兵士で殺された人）など、無残で特異な死が目立つことだそうです。命を大切にしない戦争に悲しみと怒りを感じます。

戦後 75 年、戦争を知らない世代が 80%以上になってきました。これからどのように次の世代に戦争の記憶を伝えていくかが大切であり、これからも戦後〇〇年を守りたいというまとの言葉が身にしみました。そして私たちにできるのは、ひとりひとりの命が大切にされない戦争はイヤだという思いを、小さな声でも出し続けていくことだと思います。

聞取り

ある兵士の軍隊体験記（１）-初年兵教育編-

大橋中一郎さん

運営委員 遠藤美幸



大橋中一郎さん（2020年1月）

大橋中一郎さんは、1921（大正10）年10月30日に新潟県で生まれる（現在、神奈川県在住、98歳）。幼少期は東京都杉並区で過ごした。父親は阿佐ヶ谷駅北口の商店街で大橋洋品店を営んでいた。大橋さんは長男で一人息子、妹が2人いた。家の近所の杉並第一小学校に入学。小学校低学年時に満州事変が起きたが、子どもの頃の生活は平穏だった。子どもの頃から音楽が好きな子どもだった。杉並第一小にはたまたま音楽の先生が3人もいて、音楽教育に力を入れていた。ラジオの小学校唱歌コンクールの優勝校でもあった。ある日の放課後、上級生がハーモニカバンドで「今は山中、今は浜、今は鉄橋渡るぞと…」という歌詞で知られている『汽車』の合唱をしているのを聴いて、すっかりハーモニカの虜になった。さっそく親にせがんで買ってもらい、毎日夢中で吹いていた。

その後、小学校の途中で世田谷区代沢に家族で移り住む。世田谷区代沢小学校を卒業後、東京府立園芸学校に進学。そこになんと、ハーモニカバンドがあり入部した。このハーモニカ演奏が戦地で役立つのだ。それは後の楽しみ…。

大橋さんは園芸学校を卒業し、杉並区永福町の小さな会社に就職して測量の仕事をした。1941年（昭和16年）12月8日、アジア・太平洋戦争の開戦時、大橋さんは20歳だった。この年、徴兵検査を受け、翌年1月に東京東部第6連隊に現役兵として入営する。現在の東京ミッドタウンのサントリー美術館があるビル群の辺りである。大橋さんは20歳から24歳の若盛りに、開戦から終戦までの3年8ヵ月の間、ずっと戦場にいたことになる。終戦後は米軍の捕虜となった。

「お国」のために兵役につくのが日本男児の本懐だった時代。大橋さんは「兵隊検査で不合格だったらどうしよう…町にいられない」と真剣に思った。両親も「死ぬな、行くな」とは表立って言わなかった（言えなかった）。

◇千人針

息子や夫、兄弟や恋人を戦地に送る女性たちは、街角に立って、知り合いの女性や時に通りがかりの見知らぬ女性にも「千人針」をお願いした。「千人針」とは、1メートルくらいの

長さの白い布に、赤い糸で千人の女性に一人一針ずつ縫って結び目を作ってもらう。これは兵士の身内の女性たちが作った「武運長久」と無事を祈る「お守り」のようなものだ。白い布に虎の絵図を刺繍で描いたものも多くあった。これは虎が「一夜に千里を行き、千里を帰る」という言い伝えにあやかって描かれた。特に寅年の女性は、その人の年齢の数だけ縫うことができたので重宝がられた。



千人針の図

また、五銭硬貨や十銭硬貨を縫い込むことも行われた。これは「五銭」は「死線（しせん＝四銭）」を越え、「十銭」は「苦戦（くせん＝九銭）」を越えると考えられ、「千人針」には愛する人の無事を祈る女性たちの思いが込められていた。多くの兵士がこの「千人針」を弾丸除けの「お守り」として身に付けた。

大橋さんの「千人針」は、母と妹たちが作ってくれた。大橋さんもこれを腹に巻いて出陣した。大橋さんは中国湖北省の白螺磯で敵機の爆撃を受けた時、タコツボ（砲撃や銃撃から身を守る一人用の壕）で腹の「千人針」に手を当てた。タコツボから夜空に月が大きく見えた。その時、ふと母を思い出した。月が鏡で、母と妹たちの顔が写ってほしいと切に思ったそう。この時、なぜか父の顔は出て来ないもの……。

◇「地方気分」を抜く

軍隊に入営すると「初年兵」と呼ばれ、兵隊の基礎訓練が行われる。これを「初年兵教育」という。入隊初日、2日目までは「お客さん」扱いだが、それも3日目でお仕舞い。「お客さん扱いは今日までだ」と古年兵の声。厳しい初年兵教育が始まる。「地方気分」とおさらばだ。

軍隊では、兵営の外の世界を、「地方」あるいは「娑婆」と呼ぶ。軍隊が中心に位置し、その周りはみな「地方」というわけだ。初年兵教育の目的は、兵士たちの心から「地方気分」を叩き出し、「軍人魂」を入れることであった。「僕」「君」などの「地方語」の使用は禁止し、僕ではなく「自分」。同年兵は名前の呼び捨て。教官に対しては「〇〇殿」と呼称する。着て来た「地方服」を脱いで「軍服」を着る。身に付けているものの呼び名も軍隊特有の用語で呼ぶ。例えば、上着は軍衣、シャツは襦袢、スリッパは上靴、ゲートルが巻脚絆という具合だ。これまでの元兵士たちの聞き取りで、「上官に上靴で顔が変わるぐらい殴られた」と度々聞いていたが、最初はトランプのジョーカーではあるまいし、何のことやらわからなかった。

軍隊は階級がすべてだ。「地方」や「娑婆」での学歴も職歴も家柄も一切関係ない。一般常識は通用しない。空っぽの頭にして上官の命令を無条件で従う兵隊をつくる。

上官の「突撃」命令で敵陣に突進する、それが兵隊だ。

◇内務班と私的制裁

初年兵は「内務班（兵営の中で兵士が寝起きをする最小の単位）」を基本に軍人精神を叩き込まれる。

「ハイ、〇〇であります」。初年兵教育は敬礼と返事で始まる。初年兵は右を向いても左を向いても皆古年兵（先輩の兵）ばかり。動作の機敏さと大きな返事が鉄則だ。集合に遅れるなど、のろまでもたもたしている兵隊は古年兵からビンタを喰らう。連帯責任を課せられることもあった。時には上官次第で「自転車乗り」、「せみ」、「野球見物」などと呼ばれる私的制裁や初年兵同士の「向かい合いビンタ」が行われた。

「自転車乗り」とは、机と机の間に身体を浮かせて自転車を漕ぐ真似をさせて、「もっと早く

漕げ」と気合を入れる。兵隊の様子を見ながら「上官だ、敬礼しろ」と手を休ませてやる。計らいの心だ。

「せみ」とは、柱にしがみつかせて「ミンミン」とか「ジーンジーン」と鳴かせる。馬鹿らしいが上官の命令は絶対だ。声が小さいと言ってはいびるのだ。

「野球見物」とは、ほどよい高さの柵さだのようなものに手をかけ懸垂をさせながら「向こうの方を見ろ」と言う。兵隊は懸垂をしながら目線を上げる。「野球が見えるか」、「見えません」。何度もやるうちに見えるわけがないが、兵隊はつらいから思わず「見えました」と答える。

「どうなっている」と問われて兵隊は答えに窮する。

たまたま大橋さんは酷い私的制裁を受けずに済んだが、軍隊では殴られるのも殴るのも日常茶飯事だ。大橋さんによると、殴るにも「分別」が必要だそうだ。上官になった大橋さんが初年兵を殴る時、わざと派手な音が出るように工夫しつつも、絶対に兵隊が怪我をしないように殴った。「歯を食いしばれ」、「足を広げろ」と大声で叫んで、ビンタは見事にしっかり気合を入れて、先輩の古年兵が息を飲むようにやらねばならなかった。

◇食事と員数合わせ

午前5時。ラッパで起床。服装を整え寝具の整理をして舎前に整列。点呼。朝礼。週番士官に敬礼。朝礼を終え、「飯上げ出ろ」の号令で食事の時間だ。「飯上げ」とは兵隊たちに食事を運ぶことである。盛り付けが整えば、軍隊の日常の心得である「軍人勅諭」（5ヶ条）を唱える。

一つ、軍人は忠節を尽すを本文とすへし

一つ、軍人は礼儀を正くすへし

一つ、軍人は武勇を尚ふへし

一つ、軍人は信義を重んずへし

一つ、軍人は質素を旨とすへし

唱え終えて「頂きます」。初年兵は飯を掻き込む。早く食べて隣の下士官室へ食器を下げに行く。大橋さんは誰よりも早く飯を食べた。そして、「大橋二等兵、食器を下げに参りました」と下士官室に入る。食器を下げる時、腹が減っているから下士官の残飯をこっそり食べる。

「天皇の兵が残飯を食うな」と古年兵から怒鳴られることもあるが、「残飯を食うぐらいじゃないとダメだ」と促す古年兵もいた。常に臨機応変に対応しなくてはならない。動作が鈍い奴は身体も弱い。何事もビリになってマークされたらお仕舞だ。動作が早く要領が良い兵隊は褒められる。鈍い奴には残飯食いは到底できない。

「軍隊は要領を本文とすべし」は「軍人勅諭」のパロディである。

日本の軍隊では「員数」が大変重要であった。員は兵員の、数は兵器や被服・弾薬・食糧の数量を表す。戦争や軍隊は、兵力と武器、装備の戦いだ。数量がものをいうだけに数量の管理が徹底している。朝晩2回の点呼や、内務検査、兵器検査などで員数が合うかどうかを毎回チェックするのだ。

員数が合うかどうかは兵隊が最も留意すべき事項の一つだ。天皇陛下からお預かりした武器や被服が足らなかつたら一大事となる。もし足らないときはあらゆる手段で「員数合わせ」をしないとイケない。時に盗まれることもある。ビンタの一つや二つは平気だが、なくなったものは仕方がない。困り果てていると戦友が動いて員数を整える。戦友の有難さが身に沁みる。

「地方」では教師や会社役員でも軍隊に入れば一切関係ない。皆新兵としてこのような軍隊独自の慣習に従わなくてはならない。それが出来なければ軍隊では生きていけないのだ。

◇初年兵の気持

初年兵とは星一つの二等兵。初年兵教育時代、回りは一等兵、上等兵、兵長と皆先輩ばかりで逃げ場がない生き地獄のように思うだろうが、ここはまたよくできたもので、初年兵をこっそりと助けてくれる古年兵がいる。初年兵の隣に必ず古年兵が寝る。初年兵が2人いたら端っこに1人専用で寝る。たくさんいる古年兵の中で誰かが指名されて初年兵の横に寝る。

この人は表立っては何もしないが、陰に助けてくれる。ボカボカ殴られても黙って見ている。何も言わなくても、あんまりやりすぎたら、「やりすぎじゃないか」と言ってくれたのかもしれない。あるいは大橋をいじめようと思っていてもあの古年兵が横に寝ているならばやめておこうと遠慮することもあるかもしれない。必ずしもそうとは限らないが、このような古年兵が横にいるのが初年兵には唯一の救いになった。

大橋さんは「めったにないけどね」と前置きしながら、「たまに横の古年兵が饅頭をベッドの中にこっそり入れといてくれていてね、それを知らずに寝てしまって、後で潰れた饅頭をありがた涙に咽びながら布団にもぐって食べたことも…。もう腹が減っているのとその有難さが身に沁みて、古年兵が守ってくれているんだとも思えてね…」と語る。

それでも初年兵教育が厳しくて、その理不尽さに耐えかねて逃亡する者もいた。大橋さんもある初年兵が逃亡したのを覚えている。彼はまもなく捕まり、軍隊に戻された。この兵隊は3年経っても星一つの二等兵のままだった。

戦後、彼は盆栽会社の社長となって、戦友会で中隊長に盆栽を持って来ていた。しかし、戦友会に数回来たが馴染めなかったようだ。

◇母を思う気持ち

大橋さんは、厳しい初年兵教育の最中、母に会いたい気持ちと、どのようにその思いを律するかのをせめぎ合いに苦悩したと語る。心の中で、白い紙に1メートルほどの横線をずっと描いた。今日はここまでの線まで母に会いたい。明日はここまでの線まで…と今日より会いたい（帰りたい）気持ちの線を短く描いた。こんなことを毎日心の中で思い描きながら耐えたそう。いっばしの日本男児といえどもまだ20歳の若者である。母を思う息子の気持ちがとても切ないエピソードである。

初年兵教育中に、高山という名の優秀な同年兵がいたそう。大橋二等兵と高山二等兵は共に「飯上げ」の任務についた間柄だった。

ある時、高山二等兵に「母死去」の訃報が届いた。にもかかわらず高山二等兵は帰宅を許されなかった。非常に優秀な兵隊であったが、母の死を境に彼の様子がおかしくなり、度々訓練中に「頭が痛い!」と頭を抱えてしゃがみ込むようになった。しまいには訓練が出来なくなり、いつの間にか兵営から姿が見えなくなったそう。

大橋さんは高山二等兵があのだうなったのか知る由もないが、母の死がきっかけで彼の精神がおかしくなったと今でも思っている。

◇戦地へ

2ヵ月ほどの初年兵の基礎訓練が終了した。大橋二等兵は、満州第675部隊の通信兵として満州へ出陣。部隊はソ連（現ロシア）と満州の国境警備が任務であった。ソ連軍との戦闘を対象に日夜厳しい訓練が行われた。

満州の気候はすこぶる厳しい。夏は酷暑で冬は酷寒。井戸があっても生水が飲めなかったのがつらかった。このような日々を乗り越え、戦場での訓練に耐えながら一人前の兵隊に鍛え上げられていった。

1943（昭和18）年12月、大橋さんは第5航空軍司令部空地連絡中隊に転属。陸軍軍曹として分隊長の任に就く。この部隊は飛行機と地上との交信が任務。上海の飛行場で作戦訓練を経て、武漢、白螺磯、長沙、応州と中国の内陸に向かった。

☆つづく…



2020.8.24. チュウサギのエサ探し

※本稿は、『きらめきプラス』2020.4月号(84号)最後の証言「厭戦」(歴史研究家 遠藤美幸)に掲載されたものです。

連載

日吉第一校舎ノート（20） 西暦と皇紀（その2）

会長 阿久沢 武史

平沼亮三は慶應義塾で学び、実業家であるとともに衆議院議員や貴族院議員を歴任、戦後は横浜市長を務めた。同時にアマチュアスポーツの各種団体の会長を歴任し、「スポーツの父」と呼ばれた。そして昭和7年のロサンゼルスオリンピックの日本選手団団長を務めたのが、この平沼であった。

昭和6年（1931）10月に東京市会がオリンピック招致を満場一致で可決した翌月、永田秀次郎市長はNOC（国内オリンピック委員会）である大日本体育協会の会長岸清一と副会長平沼亮三と懇談会を開いて協力を要請した（橋本一夫『幻の東京オリンピック』講談社学術文庫）。岸は慎重な態度を示したが、翌年のロサンゼルスオリンピックには選手・役員含め合計192人の大選手団を派遣した。これは開催国アメリカに次ぐ人数であり、この大会で日本は大健闘し、競泳でメダルを量産、陸上競技・馬術等でもめざましい活躍を見せた。競技の様子はラジオでも放送され、国内の関心はいやがうえにも高まることになる。それは当然、次（ベルリン）の次の大会を東京に招致するという機運にもつながり、世界の「五大国」のひとつである日本の首都で、近代オリンピック史上はじめてとなる東洋での開催に向けてIOCとの折衝が展開された。平沼は大選手団の派遣について次のように述べている（平沼亮三・松本興『スポーツ生活六十年／聖火をかかげて』大空社）。

スポーツ以外に我が国では後二回後の第十二回大会を、東京に於て開催したいといふ運動があり、そのためには多数出場して、日本がスポーツに如何に熱心であるかを示すと同時に、日本が主催国となり得る可能性を認識させる必要があつた。

前回のアムステルダム大会の選手団は56人、その三倍以上の人数を送り込んだということ自体、東京招致に向けての強い意志表示だった。平沼も団長として精力的に活動したに違いない。

もともと慶應義塾の日吉開設に際して、平沼は非常に大きな役割を果たしている。『慶應義塾百年史』中巻（後）によれば、昭和2年（1927）12月6日の大学評議会において敷地拡張と設備改善問題に関する特別委員を選出し、翌3年（1928）5月15日の評議員会で設備改善委員会を設置、評議員から平沼もメンバーに加わっている。次いで6月28日の委員会において候補地を神奈川県下に求めることとし、平沼を含む3名を移転候補地詮索委員に選び、翌月には横浜市神奈川駅付近の土地を検分した。こうした中で8月に東京横浜電鉄株式会社から日吉台の土地7万2千余坪を無償提供する申し入れが、平沼を介して義塾に提出された。平沼は日吉開設に深く関与した新キャンパス建設の立役者の一人だったということになる。

第一校舎の設計から竣工までの2年間は、オリンピックに関連して日本国内はこのような空気の中にあつた。ロサンゼルスオリンピックでの日本選手の活躍と連動して東京招致の機運が高まり、開催年となる紀元2600年に向けて、「皇紀」が急速にクローズアップされることになる。そうした風を受けながら、平沼亮三の意思が、あるいは平沼と個人的に親しく、スポーツをこよなく愛した新塾長小泉信三の意思が、正面玄関の皇紀に働いていた可能性がある。小泉が塾長に就任したのは、昭和8（1933）11月であり、日吉開設の資金集めのために「全国各地を東奔西走」（『慶應義塾百年史』中巻（後））し始めた時期と重なっている。

東京オリンピックは、結局「幻」で終わった。昭和11年（1936）のIOC総会で東京開催が正式に決定されたものの、長期化した日中戦争を理由に、昭和13年（1938）7月、日本政府は自ら中止を決めた。万国博覧会も同じ理由で延期となり、昭和15年には紀元2600年式典のみが国家行事として挙行される結果となった。この式典によって、「万世一系」思想が一つのピークを迎えることとなる（ケネス・ルオフ『紀元二千六百年 消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版）。昭和13年（1938）には、すでに国家総動員法が制定されており、戦時体制の形成が進められていた。ただ、もともとオリンピックの東京招致は、イデオロギ

一的側面よりも経済的側面の方に主たる関心が注がれていたという。オリンピックの招致と万博の開催によって経済的発展を遂げ、日本が経済的にも世界の一等国になるという期待がそこにはあり、そのために「皇室ブランド」が利用されたというのである(古川隆久『皇紀・万博・オリンピック』中公新書)。第一校舎が設計・建設された昭和7年から9年の日本は、満州国建国や国際連盟からの脱退という大きな出来事はあったものの、1920年代から続く自由な大衆文化の空気がまだ十分に残っていた。決して「暗い時代」ではなかったのである(岩田真治『カラーでよみがえる東京』NHK出版)。「皇紀」は確かに「皇室ブランド」の象徴ではあるが、偏狭なナショナリズムの色だけで塗り固められていたわけではなかった。むしろそこには経済発展や豊かな生活を望むこの時期特有の「明るさ」があったとも考えられるのである。

さて、正面玄関の皇紀に、慶應義塾の何らかの意向が働いていたとしてもいなかったとしても、漢数字で書かれた「二千五百九十四年」というデザインが、設計者網戸武夫の意思に反するものであったとは簡単には言えない。まず直線を主体とする漢数字は、正面玄関の表情の基盤になっているアール・デコのデザインであると解することができる。そして、そこから醸し出されるクラシカルなイメージは古典主義の建築にふさわしく、またアール・デコのシンプルな造形がそこにモダンな印象をも加えていると考えられるからである。皇紀にはクラシックとモダンが融合している。古くて新しいもの、それがこの時期の「皇紀」から受ける独特のイメージだったのではないかと思うのである。

正面玄関に向かって左端、西暦と皇紀が記されたレリーフの上の壁(三階部分)には、もとは大きな円形の時計があった。これもアール・デコと呼んでいいシンプルでモダンなデザインである。銀杏並木や櫟並木がまだ若木だった頃、通学時の並木道や陸上競技場から容易に見上げることができたにちがいない。いわば学園のシンボルクロックである。アール・デコのレリーフに併記されている西暦と皇紀、それは西洋の時間と日本の時間を意味する。そしてそれを統合するように、過去と現在と未来をつなぎ、悠久の時を刻む大時計。世界地図のカップはその下にあった。

設計図では、ここに時計はなく、円窓が描かれている。設計図には世界地図のカップもない。あるのは台座だけで、その上のレリーフもない。レリーフの場所に記されているのは、「LITTERAE」「LEX」「OECONOMIA」というラテン語の文字である。それぞれ「文芸」「法律」「経済学」を意味し、ここが文・法・経済の予科の校舎であることを意識したものである。それがなぜアール・デコのレリーフになったのか、その理由はわからない。ただ、この校舎で学ぶのは、古代ギリシア・ローマに源流を持つ西洋の近代的な知の体系であり、レリーフ中央に彫られたペンの意味と根底で重なるものである。

『君たちはどう生きるか』で、コペル君は地球を包む人間の網目のつながりに気づき、ギリシアから遠い東洋の果ての島国をつなぐ悠久の時の流



竣工時の大時計、福澤研究センター蔵

れを思い、人間が作り上げてきた美しい文化を思う。そして、「学問や芸術に国境はない」という思いに胸を膨らませる。長い時間の中で育まれた西洋と東洋の文化の融合、それはあたかも第一校舎を見るようである。西洋と日本の時間の重なり、クラシックとモダンの融合、それらはともに決して対立しあうものではない。日吉の新キャンパスは、第一校舎の世界地図のカップに象徴されるように、世界に向けて開かれた「知」の空間として誕生したのである。

開校からわずか7年後の昭和16年（1941）12月8日、日本はハワイ真珠湾を奇襲し、太平洋戦争が始まる。やがて戦局は悪化の一途をたどり、学ぶ場（教える場）から生徒を戦地に送り出す場になっていく。昭和19年（1944）3月10日、慶應義塾と海軍は施設の賃貸契約を結び、第一校舎の南側に軍令部第三部（情報部）が入った。ここで米国情報や中国情報、ソ連情報などが分析され、まさに世界中の情報が集まるセンターになっていく。中條精一郎や網戸武夫が「学びの空間のロマン」を願い、世界地図のカップで海外への飛翔の夢を表現しようとしたこの校舎は、学問や文化とはまったく異なる次元で、世界の情報が集積される場になっていくのである。

本稿は『慶應義塾高等学校紀要』第46号（2015年）に発表した拙稿「日吉第一校舎ノート（二）クラシックとモダン」の再録となります。

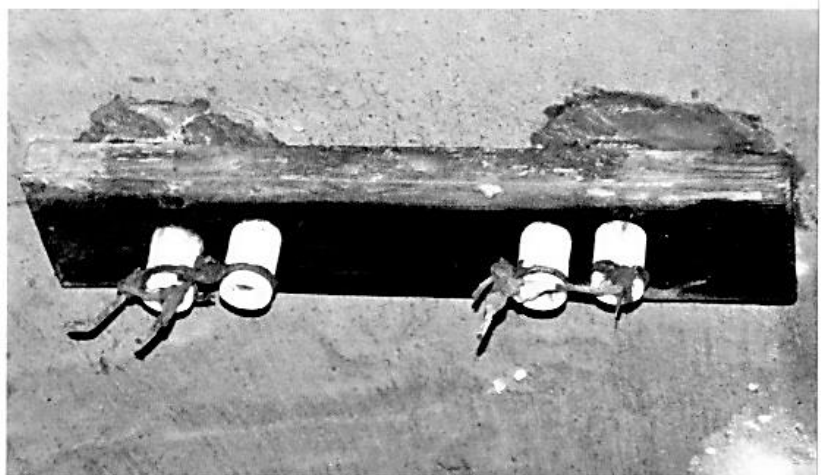
連載**地下壕設備アレコレ【29】****今も残る白い陶器の低電圧用碍子（ガイシ）**

運営委員 山田 譲

①日吉海軍壕の残存碍子

日吉の連合艦隊司令部地下壕には、電気配線用の碍子が残されています。通路部分にはほとんどないのですが、バッテリー室天井には10個ほど残っていて、そのうち4個は1枚の木板に2個ずつ対になって取り付けられています。（写真参照）その他、作戦室の天井に1個、作戦室前の通路に2個（以前は3個あったが1個脱落）、その他、機械室の床にも1個落ちていました。

地下壕の天井には、長さ50cm×幅12cm位の木板が取り付けられており、これに碍子を取り付けられています。この碍子は白色の陶製で、長さ50mm、直径35mmの「低圧ピン碍子」です。先端の方に幅9mmの丸溝がついています。全体に円筒型で中央に細い丸穴があげられていて、鉄製の木ネジ（木材に捻じ込むための先の尖ったネジ）が貫通しています。この木ネジを台座の木板にねじこんで固定します。この碍子の先端の丸溝に電線をしばりつけて配線します。



バッテリー室碍子 2018.10

②日吉の碍子は低電圧用、蟹ヶ谷通信隊地下壕には高電圧用碍子も



蟹ヶ谷・高圧碍子
（新井揆博さん撮影） 1993.1.7

碍子というのは、電気を絶縁して電線から漏電するのを防ぐ電気器具です。いろいろな種類があるのですが、日吉の地下壕に残っているものは低電圧（100V）用です。この碍子は一般家屋で、屋内外の電力線（いわゆる電灯線の配線に使われていたものと同じです。

地下壕内の碍子は2個ずつの組になって取り付けられています。ですから2本の電線を組にした配線で、直流電気または単相交流電気の配線です。3本1組だと3相交流200V電気です、これは工場のモーター用電源です。この3つ組の碍子は地下壕内にはありません。

これに対して、高圧碍子とよばれるものが、蟹ヶ谷の海軍通信所地下壕内の壁に取り付けられていました。（写真参照、この現物の1つは法政二高・教育研究所に保管されています。）これは高電圧用の碍子です。高電圧だと漏電しやすいので絶縁性を高めるために碍子も大型になります。

道路の電柱の上にトランス（変圧器）が乗っていますが、ここで高圧電気（6600V、戦前は3300V）を変圧して100Vに落とします。この高圧電気を、蟹ヶ谷の場合は地下壕に直接入れていたわけです。当然、地下壕内に変圧器があったこととなります。

日吉の場合は、地上の変圧器で100Vにして地下に電気を引いていたようです。連合艦隊司令部機関科電機長だった菅谷源作氏は「地下壕の電気は寄宿舎のボイラー室の配電盤から引いていた」（生協ニュース53号、1990.10.3.）と語っています。

③地下壕内は高湿度、水滴で電気ショートも

なぜ変圧などという面倒なことをするのかというと、送電には交流電気を使うためです。発電所の電気は、機械的な回転力を電気に変えるので交流になります。この交流電気は電線を通すと、誘導電流を発生させて電気抵抗を生じます。これは電力ロスになります。それを防ぐために高電圧で送電します。

しかし、高電圧のままでは危険ですし電気器具も使えません。それで変圧器で電圧を下げます。逆に100Vの定電圧に下げると、長い配線では電力ロスが起きて電圧が下がってしまいます。そのため、あまり長く配線できません。日吉の長い地下通路の配線では、どうだったのでしょうか。ちょっと気になりますが、よくわかりません。

他方、地下壕内は湿度が高く、特に暑い夏場は天井・壁が結露して水滴がたれてきます。碍子も当然、濡れてしまいます。航空本部の地下壕にいた元理事生の松原智恵子さんは「天井に沢山の水滴が出来て電気がショートしたり電球が切れたりする事もあって、机の上に椅子を乗せその上に立って天井の水滴を拭いたものです。」（生協ニュース68号、1994.3.31）と回想記で書いています。

④碍子メーカーは「軍需会社」に指定

日吉地下壕の「低圧ピン碍子」には、会社名やマークがないのでメーカーは不明です。ちなみに陸軍登戸研究所26号棟の天井配線に使われていた低圧碍子には、社名はありませんがNDKと読める会社マークがついています。日本電気会社でしょうか。（26号棟はすでに解体撤去されていますが、明治大学登戸研究所資料館に建物部材が展示してあり、この碍子を取り付けてあります。）

碍子メーカーとして有名なのは、日本ガイシ株式会社です。その社史『日本ガイシ75年史』によれば、明治4年に日本陶器として創業し碍子も生産していました。そして大正8年

に碍子部門を独立させて、日本碍子㈱を設立したとのことです。戦時中は軍需向けが急拡大し、昭和19年1月に「軍需会社」に指定され、碍子生産も昭和19年に急増しています。ロケット特攻機「秋水」の燃料製造用耐酸磁器の生産もしていたと書かれています。しかし戦後は生産停止で、「混乱と低迷」の「苦難の時代」だったとあります。

『社史』ですから全てを肯定的に書くのだとは思いますが、これだと戦争は儲かってよかったと言っているようなものですね。このようにして「戦時体制」がつくられ、工員・社員が軍需生産に駆り立てられ戦争に協力させられていったのだと思うと暗い気持ちになります。

連載**海外の戦跡めぐり（15）支那事変—南京事件・中国**

運営委員 佐藤宗達

1945年3月10日の東京大空襲では10万人以上が死亡したと云われていますが、南京事件では中国兵士・市民が30万人殺されたとも云われております。30万人も殺せるものだろうか、現地を自分の目で見て確かめようと昨年秋、南京を訪れました。

1937年7月7日、中国・北京の郊外・盧溝橋付近で勃発した盧溝橋事件を機に北支事変は各地に飛び火、8月9日には海軍が仕掛けたと云われる大山事件により第二次上海事変に拡大、更に海軍は渡洋爆撃で南京爆撃を開始、9月2日には支那事変と改称した。中国軍の強い抵抗によって苦戦した日本軍は11月5日杭州湾に上陸、上海戦線の背後を突き11月11日上海を制圧した。日本軍は首都・南京を攻略すれば中国は屈服し、親日政権を樹立できると

考え陸軍参謀本部の統制に従わず南京進撃を開始した。食料は現地調達、民家を占拠して宿営しながら進撃、約20万人の日本軍は各地で戦闘、略奪、破壊をしながら南京を目指した。

当時、南京は城内と周辺で約100万人を超える大都市で住民、難民が多数残留していた。中国軍は市街・東の紫金山にトーチカを構え防戦したが、12月12日南京は陥落した。

市街の中心・南京城は1366年（元の至正26年）に建設が始まり、28年の歳月をかけて



南京城の中華門

けて周囲34kmの城壁を完成させた。正門である中華門は明代に造られ4層で、まさに難攻不落の城壁です。日本軍は東南の光華門を戦車で砲撃、突入して城を陥落させた。残留していた人々は市街の北を流れる揚子江を渡って逃げようと、埠頭のある下関（シャーカーン）に殺到したが日本軍はここを制圧して兵士、市民を殺害した。下関地区の幕府山の麓・草鞋峡に侵華日軍大屠殺草鞋峡遭難同胞記念碑があり、碑面には「幕府山の中国軍が投降してきたが手におえず機関銃で射殺、油をまいて焼き、揚子江に流した」とのこと、その数7万にのぼると刻されております。

南京市街を歩き、南京城の大きさを実感し、下関・揚子江を眺めると、かなりの人々が殺されたものと感じました。



侵華日軍大屠殺草鞋峡遭難同胞記念碑

新刊本の紹介

『戦没学徒 林尹夫日記〔完全版〕—わがいのち月明に燃ゆ—』

2020年7月 三人社刊

運営委員 山田譲

①日吉の元電信兵・保坂初雄さんの娘さんからのお手紙

今年の8月に、日吉の連合艦隊司令部電信兵だった保坂初雄さんの娘さんの原まゆみさんからお手紙をいただきました。初雄さんはご健在ですが、特養ホームに入所していて「感染防止のため面会不可となり家族とも会えず」と、つらいお気持ちを書いているらしいです。そして、この本の出版を紹介され、斉藤利彦氏の解説の中に「尹夫（ただお）の死の状況を示す大和航空基地に同時期に着任した父初雄の証言が書かれています。若き尹夫の生と死をもたらす戦争。何度も父からきいた奈良……私にとって、父の人生を改めて浮かび上がらせる章です。」とありました。

それで私はこの本を読んでみました。原さんは、斉藤利彦氏の「解説が見事」と書いていましたが、その通りで100ページにおよぶ力作でした。この林尹夫日記は、かつて1967年に全文でなく8割ほどを本にして出版され、当時かなりの反響をよんだものだそうです。それを今回、改めて全文が「完全版」として出版されました。

②林尹夫と保坂初雄さんの接点

林尹夫は京都帝大文学部に在学中に21才で学徒出陣、海軍飛行予備学生となりました。そして1945年7月27日夜、一式陸上攻撃機の機長として奈良県大和航空基地から四国沖へと索敵偵察のため飛び立ち、米軍空母艦載機の攻撃を受けました。「我れ敵を発見、敵戦闘機の追跡を受く」と打電し、さらに「ツ・セ・ウ」（敵戦闘機の追跡を受く）と連送し、6名の乗員とともに消息を絶ちました。23才でした。



航空服姿の林尹夫（美保航空基地宿舎にて）
立命館大学国際平和ミュージアム所蔵

他方、日吉の連合艦隊司令部の電信兵だった保坂初雄さんは、林尹夫が所属し離陸発進した大和航空基地へ、7月26日に異動を命ぜられました。第三航空艦隊司令部通信基地勤務です。この大和航空基地は、本土決戦体制の一環として内陸につくられた急造の飛行場です。防空壕も整っていませんでした。保坂さんは私たちに話していました。（会報130号、2017.4.27.）

私たちが保坂さんからお話を聞いたのは、2016年11月1日でしたが、これに先立ってこの年の5月に斉藤利彦氏は保坂さんに聞き取りをしていました。

その時の保坂さんのお話で斉藤氏が衝撃を受けたのは、「上官に通信のわかる人がいなかった。時々受信機を耳に当て、よくこんなのができるなあと言っていたくらいだった。傍受した内容がどのように使われていたのかも通信兵にはわからなかった」という体験談です。

林尹夫以下、索敵偵察機の乗員が命をかけて送信した米軍空母部隊の情報は、一体、何の役に立ったのでしょうか？ 斉藤氏は「尹夫の出撃と死はどのような意味があったのだろうか」と書いて

います。実際、この翌朝7月28日、米軍艦載機の大編隊が西日本各地に襲いかかりました。呉軍港では戦艦、空母の他、かつて連合艦隊司令部の置かれていた巡洋艦大淀も撃沈されてしまいました。これに対して日本軍は、何のなすすべもなかったのです。

③林尹夫の思索と苦悩——「俺は、あくまでも林尹夫でありたい」

人の命を使い捨てにして顧みないこの軍隊の勤務を、林尹夫はどのような気持ちで担っていたのでしょうか。

第三高等学校をへて京都帝国大学史学科に進学した林尹夫は、たいへんな読書家でドイツ語、フランス語の原書も読みこなすインテリでした。1941年10月3日には「個人主義、自由主義の理想、失うべからず。」と書いていました。そして海軍入隊後も、密かに日記を書き続け、その心の内を吐露しています。その日記を戦友の一人が隠しもって、遺族に届けたのだそうです。

その思索のあとをたどることは私のおよぶところではないのですが、1944年5月31日の日記には「我々は……軍人として精強となるのが最も緊急の要務である。……ただ俺は有能であるとともに、あくまでも林尹夫君でありたい。」と書きつけています。そしてまた1944年6月25日には「一個の人間が、無価値なる虫ケラの様におしつぶされてゆく事実は果して必然であっただけですむのであろうか。……日本の興亡。その故の犠牲、やむをえざる歴史の捨石という事は真実だ。……その事実を……自分自身と、また俺の知友の身にせまった事態として考える時、一体我々は如何にこれを考えたらよいのであろうか。……この世界史の運命と個人の運命はどのようにして一致せしめられるものであろうか」と苦悩を刻んでいます。

他方でドイツ無条件降服(1945年5月7日)後の日付けのない記述には「敗の確信、ああ実に昭和17年頃よりの確信が今にして実現するさびしさを誰が知ろう。……我等の祖国まさに崩壊せんとす。……愚劣な日本よ、優柔不断なる日本よ、汝いかに愚なりとも我等この国の人たる以上、その防衛に決起せざるをえず。」とおのれを奮い立たせています。

林尹夫の兄、林克也氏は1945年6月に弟を鳥取県美保航空基地に訪ねた時の会話を記しています。「私は、ここで言った。『死んではだめだ。俺は死んではならぬと決心して行動してくれ』と。弟は『もうぜんぶ終わったのだ。だめだよ兄さん』と答え、いきなり優しく、きつく私を抱きしめた。」「これが二人の永別だった。」私には、言う言葉もありません。

④付記——哲学者・田辺元の講義

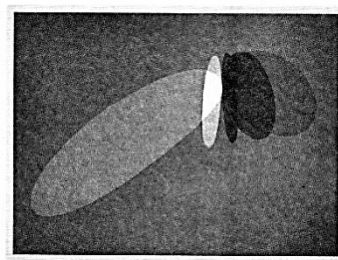
京大の高名な哲学者であった田辺元の講義を、林尹夫も当然ながら受講しています。これについて1943年5月21日の日記に記しています。「一昨日、田辺先生の月曜講義で『死生』なる題のもとに話をされた。……我々の死の態度は決死という点にあると説かれた。……死そのものへ我々がとびこんでゆく。……尊い考え方と思った」という。西田幾多郎とならぶ田辺元の哲学が当時の青年学生を戦争に駆り立てたのです。これを戦後の田辺元は「心弱き私」として「懺悔」しています。しかし、今日、菅政権が日本学術会議会員の人選に露骨に政治介入しているのを見ると、学問・思想を政治的に「戦時体制」の下に組み敷くことが何を結果したのか。林尹夫の苦悩に満ちた言葉が重く訴えているように思えてなりません。

戦没学徒 はやしただおにつき

林尹夫日記

〔完全版〕

——わがいのち月明に燃ゆ——



三人社

秘話

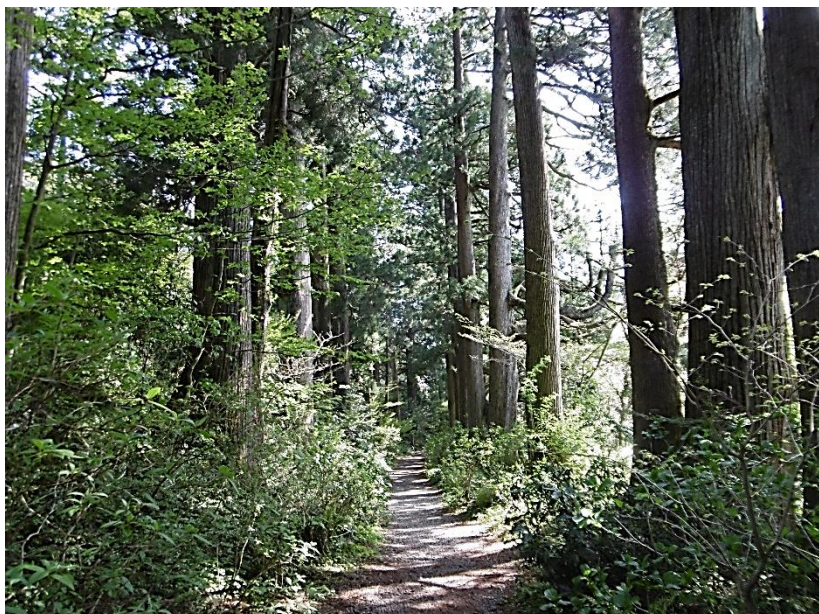
木造船

運営委員 佐藤 宗達

滝廉太郎作曲の箱根八里に謳われている「昼猶聞き杉の並木」は今も現存し旅行者の憩いの場となっております。この杉の並木があわや伐採の危機に面した事がありました。

1943 年頃から軍部は船舶の不足を補うために木造船の建造を計画、民間企業に厳命しました。1 例として松下幸之助は松下造船を設立、終戦までに 250 トンクラスの中型木造船を 56 隻建造しました、さらに松下航空機を設立、木製飛行機もわずかですが 3 機完成させております（井植敏・私の履歴書を参照）

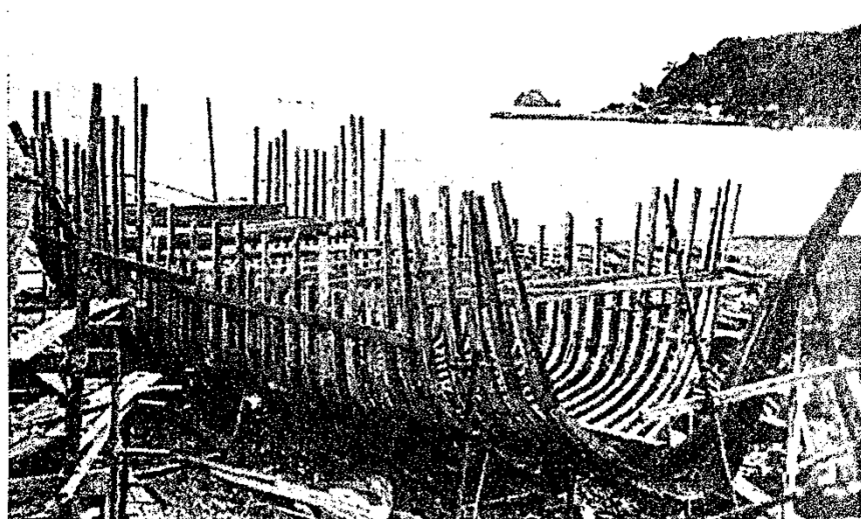
さて木材はどう調達したのでしょうか、各地で巨木が供出させられています。そして戦争末期には軍から神奈川県知事を通して箱根町ほか二ヶ村組合



箱根の杉並木

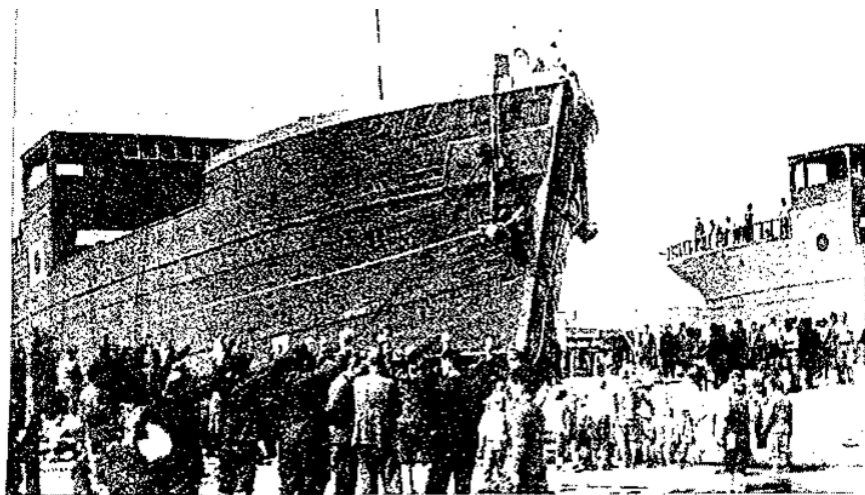
に杉の供出命令がでました。

箱根町役場の担当者・田中隆之氏は県庁に呼び出され供出を催促されたが昼の休憩に掛かり、隙をみて関係書類を持ち帰り焼却、本人は従軍僧に志願即戦地に赴いてしまい、書類行方不明で大騒ぎになったものの終戦を迎え供出は立ち消えになってしまいました。こうして杉の並木は今に残っております。



製造中の木造船

…静岡・伊東1943/11/18

木造船の進水。輸送船の被害急増と原料不足から
大手造船会社も木造船を増産し始めた…1943/10月

——☆みなさんの戦争体験談・資料募集☆——

戦後 75 年の今日、アジア太平洋戦争の記憶がどんどん遠のきつつあります。戦争体験者も高齢化し、ご存命の方も少なくなっています。これを少しでも語り伝えていくために、会員のみなさんの戦争体験、父母や親族・知り合いから聞いた戦争の体験談や資料などありましたら、お寄せください。短くてもかまいません。会報の記事にするなどして語り伝えていきたいとおもいます。よろしく願いいたします。

なお体験談等をお寄せいただく際には、氏名、年齢（生年月日）、当時の役職・所属校、年令、現在の連絡先など付記いただけると幸いです。

活動の記録

2020 年 8 月～11 月

- 8 / 21(金) 会報 143 号 発送（来往舎 小会議室）
- 9 / 15(火) 運営委員会（来往舎 小会議室）
- 9 / 18(金) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会（かながわ県民センター）
- 9 / 21(月) ガイド学習会（ギャラリー&スペース弥平）
- 10 / 1(木) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会（かながわ県民センター）
- 10 / 3(土) 第 2 回ガイド養成講座 《フィールドワーク》 慶應キャンパス外周
3 月の予定でしたが、コロナ下で延期となっていました。
- 10 / 7(水)～30(金) 小池汪写真展「戦後 75 年 戦争暮らし」（川崎市平和館）
当会も協賛
- 10 / 10(土)・11(日)「第 25 回 2020 平和のための戦争展 in よこはま」
特別企画 10 日《核・宇宙・環境》 11 日《戦争・空襲》（かながわ県民センター ホール）○今回展示は無く、ホールでの講演のみ。コロナ対策のため定員をホール収容人数半分の 130 名としました。両日共、定員一杯の参加がありました。朗読劇の日吉台中学校演劇部の皆さんは講演後退出。
- 10 / 13(火) 運営委員会（来往舎 小会議室）
- 10 / 27(火) 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会（かながわ県民センター）
- 11 / 1(日) ガイド学習会（箕輪町集会所）
- 11 / 7(土) 第 3 回ガイド養成講座（箕輪町集会所） 《戦争体験を聞く》
- 11 / 12(木) 運営委員会（来往舎 小会議室）

○地下壕見学会について

143 号でお知らせしましたが 11 月現在、地下壕見学会再開は未定です。

ガイド学習会、運営委員会で再開時の見学スタイル等、検討しています。

★お問い合わせ・申込は見学会窓口まで Tel/Fax 045-562-0443 喜田（午前・夜間）

連絡先（会計） 亀岡敦子：〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 Tel 045-561-2758
（見学会・その他） 喜田美登里：横浜市港北区下田町 2-1-33 Tel 045-562-0443
ホームページ・アドレス：<http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報（年会費）一口千円以上
発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921
代表 阿久沢 武史（加入者名）日吉台地下壕保存の会
日吉台地下壕保存の会運営委員会